

# プレイ・スカルプチャーの展開

## 鈴鹿大学 「1棟プレイルーム前での実践」

—教育・保育活動の深化のため—

1. プレイ・スカルプチャーの定義
2. 活動の名称・目的・意義・方法
3. 初動期（2019年、2020年、2021年）
4. 派生期（2022年～）
5. これからの展開



## 1. プレイ・スカルプチャーの定義

プレイ・スカルプチャーとは、あそぶことができる彫刻のことを指し、スウェーデンの作家ニールセンの一連の作品が起源とされている。その最大の特徴は「既存の遊具がこどもにあそび方を強要するのに対し、プレイ・スカルプチャーはこどもにあそび方を自ら創造させる」ことがあげられる<sup>(1)</sup>。

本活動では、もう一步踏み込んで、こどもにより良いあそび環境そのものを提案・実践するための造形表現として、プレイ・スカルプチャーを「こどものあそびを誘発させる彫刻空間」として定義する。

## 2. 活動の名称・目的・意義・方法

名称	・プレイ・スカルプチャーの展開、「1棟プレイルーム前での実践」
目的	・学内での保育プレ実習・保護者対応など、学生の教育・保育活動の深化のため
意義	<ul style="list-style-type: none"><li>・学生が、乳幼児・保護者とのやり取りを学内で事前に経験しておくことは、実際の教育・保育実習に臨み、現場で即応できる実践者になるために有益である。</li><li>・こども教育学部では、「保育プレ実習」「あそび広場すずちゃん」などの機会を通じて、参加した乳幼児が自らあそびを発見し多様化していけるための様々な取り組みをしている。</li><li>・現在、主な舞台である1棟プレイルームでは、あそび活動が室内に限定されており、そこで活用すべき遊具も限定された規模のものにとどまっている。</li><li>・乳幼児の全身運動の発達を支えることは、微細運動の発達ならびに言語発達を支える土台となり、楽しみながら全身を使うには、相応の規模・機能を有した固定遊具が適している。</li><li>・学部では、造形系の授業を通して、乳幼児の健全な発達のための多様な教材研究に取り組んでおり、学生自らがアイデアを出し合い、遊具を自主制作・提供することは、あそび活動を促し、ものづくりの楽しさ・大切さを伝えていける実践者になるための好機になる。</li><li>・そのため、1棟プレイルームの室外に実用的な固定遊具を設置することで、室内・室外両方で乳幼児の育ちを援助していけるバリエーションを格段に増やすことが期待できる。</li><li>・遊具の室外設置の際には、造形的な美しさや完成度を追求すると同時に、安全性の確保が何より求められるので、周辺を芝生化することを提案したい。</li><li>・芝生化は、安全面のみならず、美観面での効果や、人が集いやすい環境の提供にもつながる。</li><li>・これら一連の、学生による遊具の実制作・室外設置・芝生化は、他にはない鈴鹿大学のオリジナル活動として、有効な広報として活用できる。</li></ul>
方法	<ul style="list-style-type: none"><li>・本活動は、これに関わるすべての学生と教員によるグループワークによってプレイ・スカルプチャー（こどものあそびを誘発させる彫刻空間）を創作し、こどもたちや地域社会に提供していく。</li><li>・本活動は、「構想 → ニーズの発掘 → 完成後のメリットの推定 → プロジェクトの規模や機能の決定 → 共同設計 → 協働制作」の手順を踏んで進めていく。</li><li>・本活動は、学生同士が互いに切磋琢磨し、信頼し尊敬し合える対等で自律的な関係を築きながら進めていく。</li></ul>



【現在の1棟プレイルーム室内】



手あそび、読み聞かせなどに最適な模擬保育空間。ただし、遊具を使った活動は空間的に限界がある。

【限在の1棟プレイルーム室外】



室外でのあそび活動を展開するには十分な広さだが、あまりにも殺風景である。現状では室内・室外の連携は図れない。

【真下制作のプレイ・スカルプチャー事例】



三重大学附幼稚園、津市



石上の丘美術館、岩手町



弘前駅前モール、弘前市



ガルス・アム・キャンプ、オーストリア

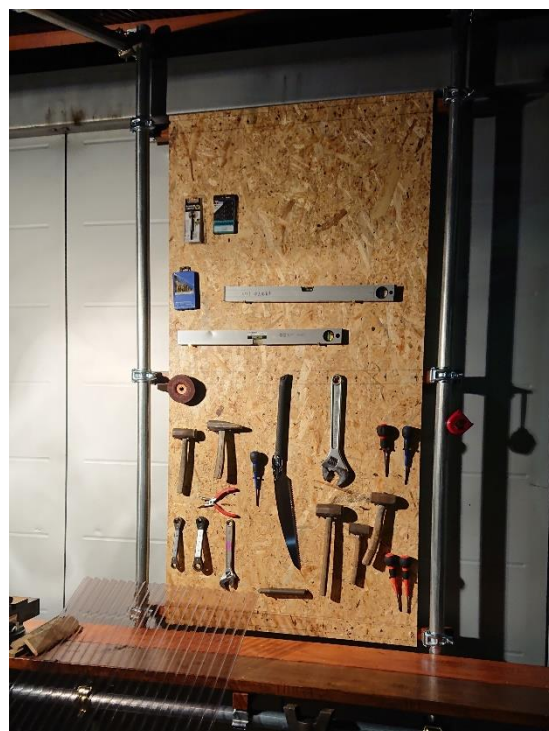


### 3. 初動期（2019年、2020年、2021年）

2019年度	<ul style="list-style-type: none"> <li>・制作拠点となるI棟周辺の作業場を学生とともに整備した。</li> <li>・学長裁量費、〇〇〇,〇〇〇円を活用。</li> </ul>
2020年度	<ul style="list-style-type: none"> <li>・こども教育学専攻4年生・3年生とともに、造形授業の一環として協働制作によるプレイ・スカルプチャー（こどものあそびを誘発させる彫刻空間）を創作。</li> <li>・実習費、約〇〇〇,〇〇〇円を活用。重機・工具・材料など不足分を真下が提供。</li> </ul>
2021年度	<ul style="list-style-type: none"> <li>・4年生（真下ゼミ）の卒業研究として、プレイ・スカルプチャーを創作。</li> <li>・同時にI棟周辺での活用を提案。</li> <li>・実習費、約〇〇,〇〇〇円を活用。重機・工具・材料など不足分を真下が提供。</li> </ul>

詳細

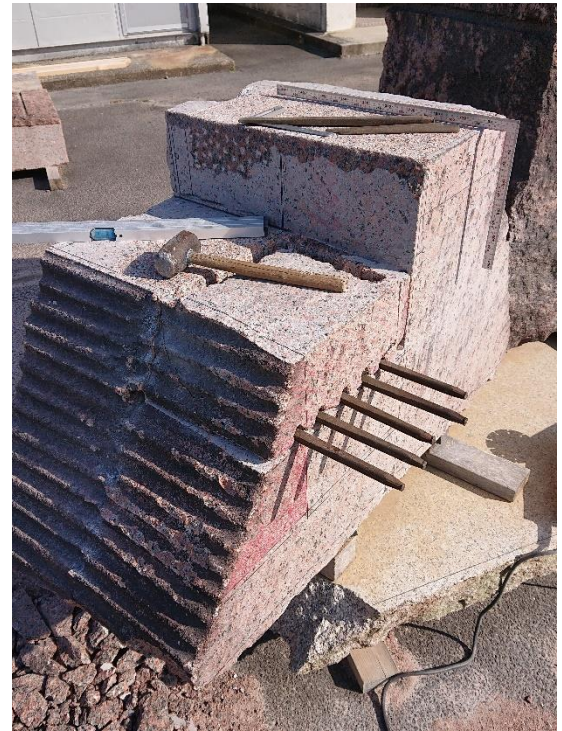
<2019年度>



活動初年度は、室外遊具の制作拠点となるI棟周辺の作業場を、学生とともに一から整備した。材料の運搬、工具の調達、ディスカッションなどを通して、学生の意識を高めさせていった。



<2020 年度>



制作風景



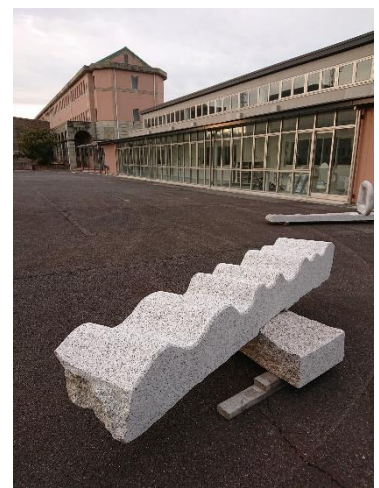
学生にとって、プレイ・スカルプチャーの創作活動は何もかもが初めて尽くしであったが、おおよその完成にこぎ着け、2021年度の入学式には新入生にお披露目することができた。



<2021 年度>



制作風景



完成作品

2021 年度は、4 年生（真下ゼミ）が卒業研究として「卒業制作+制作関連論文」に取り組んだ。造形的な美しさや完成度を追求しながら、同時に、あそびが育む能力（身体性、社会性、感性、創造性）、遊具におけるあそび行為（休息的、めまいの、挑戦的、ごっこの）、あそびやすい空間の構造、など専門性の高い知識の会得と、それらの特性を提供するための創意工夫の積み重ねを、完成作品に反映させた。

#### 4. 派生期（2022年～）

2022年度

- ・引き続き、4年生（真下ゼミ）の卒業研究として、プレイ・スカルプチャーを創作。
- ・さらに、今年度からは、知育玩具の開発にも研究の幅を広げ、乳幼児の発達を促す効果について検討する機会を増やした。
- ・管理運営費と実習費、約〇〇〇,〇〇〇円を活用。重機・工具・材料など不足分を真下が提供。

詳細

<2022年度>



制作風景



知育玩具



知育玩具



知育玩具作品と卒用研究発表会での様子。  
玩具を介して、乳幼児に心身の発達と多様な表現力を養う機会を提供することの大切さを説いた。



## 5. これからの展開

提案

- ・学生たちには、プレイ・スカルプチャーの完成をもって活動を終わらせるのではなく、どこに設置するべきか、どのように活用していくべきか、という提案・展望まで研究を深化させていく。
- ・乳幼児に実際にあそんでもらいながら、効用の検証を繰り返していくことで、PDCA サイクルの実践につながり、新しい研究領域として持続性のある活動が期待できる。
- ・また、保育内容の領域を横断する活動の広がりも推進していく。
- ・2023 年度、学部予算として約〇,〇〇〇,〇〇〇円を計上中であり、ぜひ年度内に恒久設置・緑化整備を完了させたい。
- ・恒久設置のための行政手続きと、国の定める遊具の安全基準も確認済み。

詳細

<2023 年度>



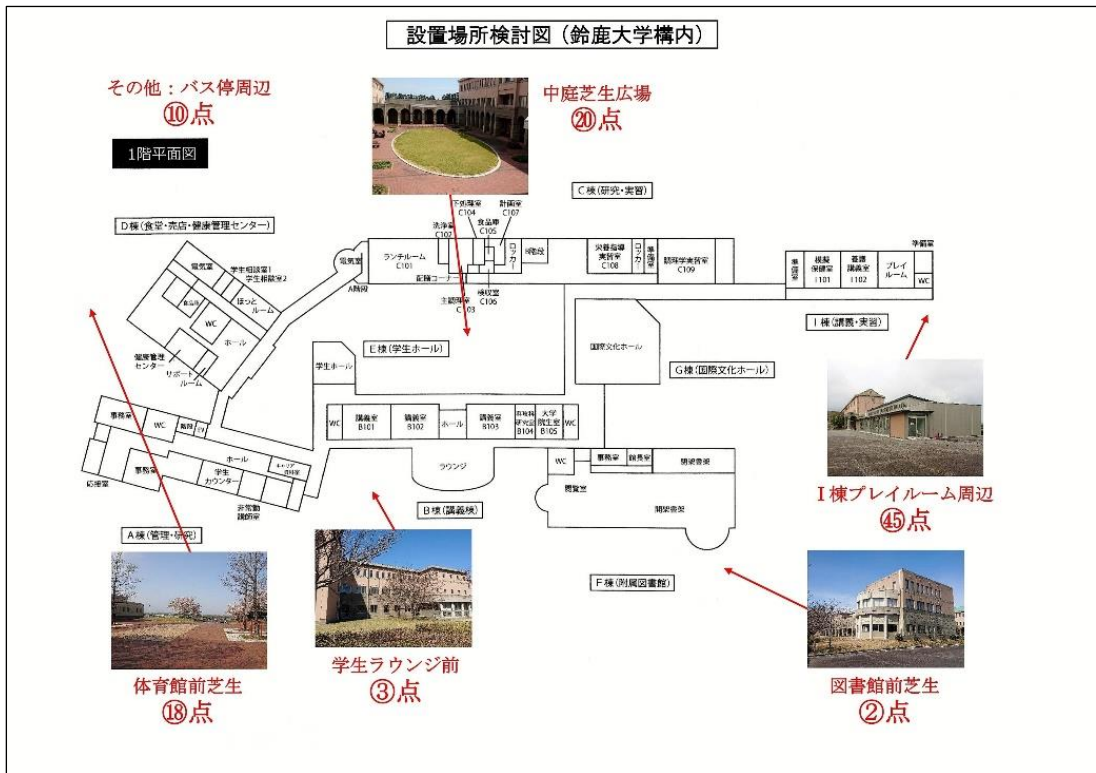
2022 年度までに完成させた室外のプレイ・スカルプチャーについて、活動に内在するリスクとハザードを慎重に見極めながら、「保育プレ実習」や「あそび広場すずちゃん」などに参加してくれた乳幼児を対象に、あそびが育む能力を検証していく。  
造形系の授業では、運動あそびやチョークあそびなど、遊具における様々なあそび行為の広がりを探り、保育内容全般にまたがる活用方法（音楽会・運動会・読み聞かせ会・オペレッタ、など）を模索していく。





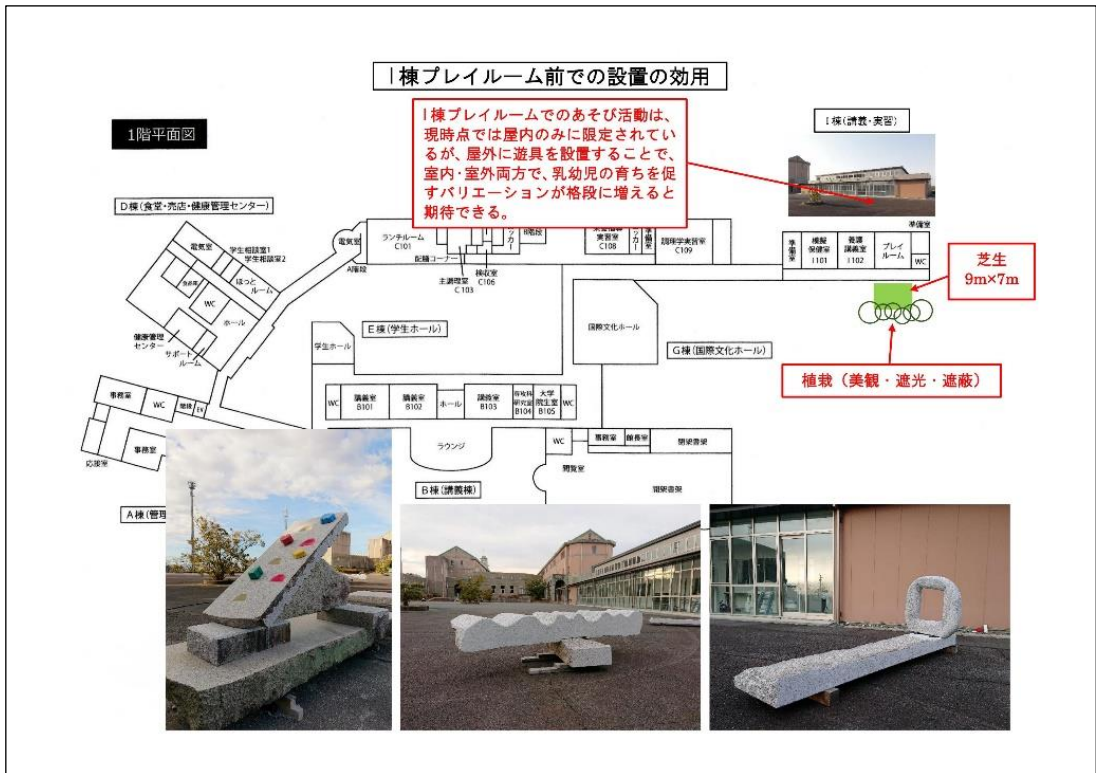
### 【設置場所検討図】

造形系の授業の受講者を対象にアンケートを実施。乳幼児が十分にあそび活動を展開しつつ安全が確保されている場所として、1棟プレイルーム周辺の室外エリアが選出された。



### 【I棟プレイルーム前での設置の効用】

プレイルームに隣接していることで、活動のバリエーションが格段に増えることが期待できる。





#### 引用文献

- (1) 市川寛也 (2016) : 彫刻の場としての公園に関する一考察 —1950年代から60年代にかけての都市公園・児童公園の事例から— , 大学美術教育学会「美術教育学研究」第48号, 77-79

---

プレイ・スカルプチャーの展開 鈴鹿大学「I棟プレイルーム前での実践」  
—教育・保育活動の深化のため— (2023年版)

制作：真下賢一・2023年8月5日